

大学での経験が社会志向的態度に与える影響

13001PAM 加納 理沙

問題

近年、青少年の規範意識の希薄化が指摘されており、教育的問題として早期の問題解決が望まれるが、大学生の規範意識の研究は少ない(牧・宮城・湯澤, 2010)。本研究では、「他者との調和的共存を志向し、社会規範を重視する」という社会志向性(伊藤, 1993)が、大学生が獲得すべきもののひとつだと考えた。ただし、特性というよりは育成可能な態度が重要だと考え、「他者との調和的共存を志向し、社会規範を重視しようとする」という社会志向的態度に着目する。規範意識獲得のために、他者と協議し様々な意見の相違や葛藤を乗り越える過程を繰り返し経験することが有効であるとされている(藤澤, 2009)。そこで本論文では、大学において他者と関わる様々な経験が大学生の社会志向的態度に与える影響について検討する。

調査 1

調査 1 の目的は、大学生が大学生活の中で経験する出来事を捉えるために大学での経験尺度を作成することであった。さらに大学での経験と社会志向的態度との関連も探索的に検討する。

方法

調査対象者 大学生および大学院生の計 258 名(男性 85 名, 女性 173 名)を対象とした(平均年齢 21.66 歳, $SD=1.024$)。

調査内容 (1)大学生が大学生活の中で経験する出来事を測定するため、廣岡・横矢・中西(2006)の大学経験尺度を参考に、62 項目を作成した(7 件法)。(2)社会志向的態度を測定するため、社会志向性・個人志向性尺度(伊藤, 1993)を採用した(17 項目 5 件法)。

結果

ここでは、大学生活の中で経験する出来事を測定する尺度について報告する。まず、学外実習などは活動そのものを経験していない者も存

在していたため、全ての活動を少しでも経験していた 140 名分のデータを用いて因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。結果、「課外活動での他の学生との関わり($\alpha=.955$)」、「授業内での他者との関わり($\alpha=.922$)」、「単位になる学外実習での社会人との関わり($\alpha=.938$)」、「卒業研究・学習における他者との関わり($\alpha=.909$)」、「単位になる学外実習での他の学生との関わり($\alpha=.946$)」、「課外活動での社会人との関わり($\alpha=.922$)」の 6 因子構造であった。今後の回答者の負担を減らすため、項目数を削減した短縮版大学での経験尺度も作成した(27 項目)。

調査 2

大学において大学生が多く経験する活動が社会志向的態度にとって重要かは不明確であるため、社会人に大学時代を振り返りどのような出来事が社会志向的態度に重要かを判断してもらう必要があると考えた。調査 2 では、社会人が社会志向的態度を身につけるために重要だと判断する大学生活の中で経験する活動を明らかにすることと、それらの経験の重要度判断に対する社会人の社会志向的態度の影響を明らかにすることが目的であった。なお、社会志向性尺度(伊藤, 1993)では、特性を測っている可能性が考えられたため、社会志向的な態度を捉えられるよう尺度を改訂することも目的とした。

方法

調査対象者 クロス・マーケティング社を通じ、Web 調査を実施した。計 300 名の社会人を対象とした(男性 232 名, 女性 68 名。平均年齢 41.76 歳, $SD=10.823$)。

調査内容 (1)社会人が重要だと判断する大学生活の中で経験する活動を測定するため、調査 1 で作成した短縮版大学での経験尺度を採用し、各活動が社会志向的態度にとってどれだけ重要だと思うかをたずねた(27 項目 7 件法)。(2)

社会志向的態度を測定するため、社会志向性・個人志向性尺度(伊藤, 1993)の文末表現を「～しようとしている」といった志向性や態度を捉えるような表現に改め、社会志向的態度・個人志向的態度尺度を作成した(17項目7件法)。(3)勤続年数, 職業種類, 大学時代に最も力を入れていた出来事についても回答を求めた。

結果

因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、社会人が社会志向的態度獲得のために重要だと判断した大学での経験は、調査1の「単位になる学外実習での社会人との関わり」、「単位になる学外実習での他の学生との関わり」がまとめられ、「単位になる学外実習での他者との関わり」となった以外は、調査1の因子構造と同様であった。また、社会志向的態度と個人志向的態度は、「社会志向的態度($\alpha=.905$)」と、「個人志向的態度($\alpha=.832$)」に分類され、態度的側面も2因子構造であることが確認できた。

社会志向的態度, 個人志向的態度, 大学での経験の種類を独立変数とした3要因分散分析の結果、大学での経験の重要度判断に対する大学での経験の種類の主効果が有意であった($F(4,1184)=9.036, p<.001, \eta^2=.031$)。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「卒業研究・学習における他者との関わり」が他のいずれの経験よりも重要だと判断されていた。

調査3

同じ経験をしていても、その経験をどう捉えているかによって、社会志向的態度に与える影響が異なる可能性が考えられる。そこで、日常的に抽象的解釈を好むか具体的解釈を好むかという、解釈レベルの選好度(Vallacher & Wegner, 1989)に着目した。高次解釈とは、目的や価値に着目する抽象的な解釈であり、低次解釈とは、方法や手段に着目する具体的な解釈である(Trope & Liberman, 2010)。調査3の目的は、大学での経験および解釈レベルが社会志向的態度に及ぼす影響を明らかにすることであった。

方法

調査対象者 大学1年生197名(男性38名, 女性159名), 大学4年生236名(男性97名,

女性139名)の計433名を対象とした。

調査内容 (1)大学生が大学生活の中で経験する活動を測定するため、調査1で作成した短縮版大学での経験尺度を採用した(27項目7件法)。(2)解釈レベルの選好度を測定するため、BIF尺度(Vallacher & Wegner, 1989)の日本語訳(應治・唐沢, 2013)を採用した。これは、25の行動の表現として抽象的表現または具体的表現の2つの選択肢から適切だと思う方を選ばせ、合計点が高いほど高次解釈を好み、得点が低いほど低次解釈を好むとされる。(3)社会志向的態度を測定するため、調査2と同様のものを使用した(17項目7件法)。

結果

大学での経験は、調査2の結果と同様の5因子構造であり、社会志向的態度と個人志向的態度も調査2の結果と同様に分類された。そして社会志向的態度を目的変数として重回帰分析を行った結果、学年を問わず、「課外活動での他の学生との関わり」、「授業内での他者との関わり」から正のパスが有意であった。また大学4年生のみ、解釈レベルからの正のパス、「卒業研究・学習における他者との関わり」と解釈レベルの交互作用項から負のパスが有意傾向であった。

総合考察

大学4年間の成果として、「課外活動での他の学生との関わり」や、「授業内での他者との関わり」による社会志向的態度育成の効果が示唆された。また社会人は社会志向的態度獲得のためにはその他のどの経験よりも、「卒業研究・学習における他者との関わり」が重要だと判断したが、学生の経験量からは社会志向的態度に対して有意な影響はみられなかった。つまり、学生の頃はまだ効果が現れないが、社会人となって視点が変わり、大学生活を振り返った時に卒業研究・学習における他者との関わり的重要性に気付くようになるということが考えられる。また、高次解釈をするほど、社会志向的態度といった目標遂行における自己制御行動へつながることから(原田・土屋・吉田, 2013)、高次解釈を好むほど、社会志向的態度が高いという結果が示されたのだろう。